

伝えたい、伝統芸能の心

高森町伝統芸能連絡協議会会長 本田 研一

阿蘇の山より色見に流れ落ちる河川は、熊野座神社の横を流れ、集落を包むかのようにやがて白川へと至ります。

山鳥からこの川を渡り、熊野座神社より戸狩へ到る道すがら、およそ十五個位の石塔・仏像・仏閣・寺院等があります。多分に色見熊野座神社がその形態を示す前に、この地を取り囲むように祈りの場として、何世紀に渡り守り継がれてきたものでしょう。そして阿蘇火山信仰の要としての役割を、果たしたことでしょう。

じつに多くの神々がいます。熊野座神社境内上手右には、墳墓と思われるものがあります。円墳型をしたその高さは二メートルを超えています。

佇むかのような石



▲色見の猿田彦神

仏も、何百年と風雪にさらされ、その顔の丸みだけがのこっています。欠かさぬお供え物に、今も昔も変わらぬやさやかな願いが添えられています。

どこにでも見出すものとして、猿田彦の石塔を見かけます。単独で大きな自然石に彫られたものから、神社仏閣の片隅に佇むものまで様々です。その大半は道案内として見る事ができ、村落の出入り口にはあります。

この猿田彦は、大半が江戸時代後期

に備えられたもので「道案内」の神様でした。

その道案内の神様としての歴史は古く、古事記までさかのぼり、天孫降臨の場面に登場します。猿田彦神が天孫を道案内して、高千穂に降り立つストーリーが有名です。

それを詳しく見る事が出来るものに、神楽があります。高森で受け継がれている神楽は高千穂系で、舞いの当初に猿田彦は登場します。

赤い天狗の面をかぶり登場する猿田彦は、赤色がもつ悪霊そして厄災を追い払う霊力にほかありません。

「道行き」で始まる高千穂神楽とは、神楽の一行が神社から神楽宿に向かう行列のことです。鼻高面を付けた猿田彦を先頭に、その日の登場人物たちが、村を巡り、宿（民家）へと舞い入る。そして一晩中、神楽が舞われます。

この「道行き」は高天が原に降臨した一行が、猿田彦に先導され、高千穂のクニへと向かったという故事にもとづくものがあります。「古事記」の記述は各地の神楽における主要な演

目であり、高千穂神楽は記紀神話を具現化した演劇でありましょう。

そして猿田彦のもう一つの特徴は、鼻が長く大男で目は赤く、いかつい神様であります。それを見て素直に思えるのは、猿田彦神は海外からの渡来民でありましょう。

琉球諸島に今も残る、女性司祭によつて営まれるシャーマニズムの儀礼のなかに「サルタル」があります。それは猿田彦神の語原だと言われておりますし、猿田彦神との役目が同じであります。台湾・フィリピン・中国沿海部にもそれは残っており、海からの使者すなわち海洋民族でありましょう。猿田彦の神は先がけ・先導・道ひらきの神として信仰されてきました。

村のつじ辻に、道案内と道中の安全を祈っていました。江戸時代中期以降になりますと、往来もわりかし自由になり、旅の安全と心のよりどころとして祭られたのでしょうか。

多くの神々、ヨナとの戦いでありました。治まれとの願いに手を合わせました。